

令和7年度 学校評価報告書 【国立市立国立第四小学校】

学校教育目標	○よく考え進んで学ぶ子 ○自分も友達も大切にする子 ◎正しく判断し行動できる子 ○体を鍛え最後までやりぬく子	重点目標	◎正しく判断し行動できる子
--------	---	------	---------------

学校教育目標	中期的目標	短期的目標	具体的な方策	評価指標	最終評価	分析	改善策(次年度に向けて)	学校関係者評価
○よく考え進んで学ぶ子	確かな学力の向上を目指す	授業改善	自分の考えを発言する活動の設定	自分の考えを発言できている児童を80%以上にする。	A	肯定的な反応は80%を超えているが、自分の考えを発言できていないと答えている児童が15%以上いる。どの学年にも全体で表現することは難しいが、ペアやグループなどの場であれば表現できる児童がいる。児童が手を挙げて発言できるような児童にとって分かりやすい、かんたんな発問を取り入れていくことが重要である。	ペアやグループでの活動の際にも、ノート等を書いて自分の考えを表してから表現できるようにして、積極的に発言できるようにする。	日常で接する際にも自分の意見を伝え、ハキハキと発言する様子が認められる。2学期になり自己評価が厳しくなることは、冷静に自分を振り返ることができていることだと思う。自分の考えを発表する機会を増やし、発表するのが苦手な子には自分の考えを伝えられる場を作ってほしい。
			友達の意見を大切にしながら行う対話的な活動の設定	互いの意見のよさを認め合いながら話し合いに参加している児童を80%以上にする。	A	肯定的な意見が9割程度と高いことから、児童の自己評価の高さが分かる。	「友達の意見の良さに気付く」の具体的な姿を発達段階に応じて示していく必要がある。	互いに意見交換することについて、イベントに参加する姿を通じて、比較的に良好である。児童の自己評価が高まっていることを踏まえ、互いに尊重し合う基本が育まれていることに感謝。
			問題解決的な学習過程を重視した授業実践	児童が「めあて」と「振り返り」を意識して授業を受けている。目標数値・・・80%	B	肯定的な反応が80%を下回っている。授業でめあてと振り返りを意識して授業を行っている学年やクラスは、肯定的な反応率が高い。	児童が目的意識をもち学習をするためにも、毎時間の授業でめあてと振り返りを確実にやっていく必要がある。2学期に向けて各教科のめあてと振り返りの具体的方法を検討する時間を設定するとともに、学んだことを生かして2学期以降の授業を改善する。	「めあてと振り返り」は、アンケートのタイミングにより、結果が変化する。「めあて」の設定をどうするかなど、具体的な内容指導の充実が望む。具体的に一人一人のめあてを設定の仕方を丁寧に見てほしいと思います。最初は低めのハードルを設定して乗り越えていってほしいと思う。
		読書活動の充実	定期的な読書の取組や読み聞かせを通じて、本に触れる機会の意図的な設定	多くの語彙や表現を獲得すると共に、文章を読解する力を養う。目標数値・・・80%	A	本を読むことが好きと答えている児童が80%を超えている。夏休みの貸し出し冊数も多く、本を借りたい、本を読みたいという欲求が高い。図書館司書の先生が中心になって新しい図書の本をどんどん取り入れてくれていることが児童の刺激になり、読書の意欲を高めている。また、国語の読む学習の関連で図書の学習をすすめている。	2学期以降も読書旬間を中心に児童の読書活動をすすめていく。	読書好きな児童が増えてきたことは大変喜ばしい。瞬時的に情報を得る手段としては、SNSが有効かもしれないが知識として記憶されたかという疑問が残る。ページをめくりながら文字を目で追うことで新しい知識に触れたり、心ふるえる感動をしたりする体験は読書を通して得られる経験である。学校司書教諭の本の知識が豊富でジャンル問わず相談できる環境がよい。
○自分も友達も大切に ◎正しく判断し行動できる子	思いやりを大切にする教育の推進する 豊かな言語環境の整備を進める	「道徳の時間」の充実	たてわり班活動の充実	たてわり班活動の実践	A	児童の肯定的な回答が9割弱である一方、教職員の回答が8割を下回っている。児童の結果は、現6年生の成果であると考えられ、児童が安心できる場になっている。	次年度以降も6年生中心に活動が展開できるようにするために、各班の担当教員の役割や価値付け方法等を示し、教職員全員で6年生を育てていく体制を整えていく。	学年間での助け合いやコミュニケーションが良好である。また、地域での行事でも異年齢のよい関わりが行われている。地域での活動でも分からないことがあると質問をし、異学年同士が交流しながら活動している様子がある。
			言語環境の整備	時と場に応じた言葉づかいができる児童を80%以上にする。	A	児童、保護者の数値が8、9割と高い一方、教員の数値が低い。授業中は比較的语言遣いを意識して生活しているものの、休み時間等で友達にかけける言葉や縦割り班活動での上級生に対する言葉遣いなど意識できていない場面もあると考えられる。	授業中、休み時間、縦割り班活動、それぞれの場面で相手に応じた言葉遣いができるようにふさわしくない言動があった時は見過ごさずにその場で指導する。昼会や学級での振り返りを行う。	学校のみ取組だけではなく、家庭と地域の影響も大きく、言葉遣いが大人も年代に応じて変化する。マスコミなどの影響もあり、子供たちだけの努力では厳しい。
			あいさつの励行	児童の自己評価による「あいさつ」の励行を80%以上にする。	B	3～6年生の質問項目が、「友達や先生、学校に来た方に自分から元気よくあいさつをしている」となっており、「元気よく」は高学年にとっては発達段階的に難しく、そのため数値が低く出たのではないと思われる。	自らすすんで挨拶をすることができれば、「元気よく」でなくてもよいのではないかと考え、削除することとした。2学期も代表委員会を中心に挨拶運動を行い、昼会や学級指導の場でも声掛けを続けていく。	子供たちが自発的に挨拶ができるようになってきた。校内で出会ったときには、自然と話しかけてくれるようになったのでは、嬉しいことである。登下校の見守りの際、目を見て挨拶できる子が増えてきている。
			道徳的実践意欲	「学校の決まりを守る」児童を80%以上にする。	A	児童、保護者の数値は約9割ととても高いが、教員は6割にとどまった。「どの程度守られているのか」という認識にズレがあると思われる。	1学期の最初に「虎の巻」を配布し、保護者会でも周知を行ったが、十分守られているとは言えない項目もある。2学期以降生活指導部で成果と課題を分析し、具体的な目標を立てて取り組めるよう発信していく。	アンケート結果について、児童と教員の肯定的に捉えている割合が異なるため、それぞれの認識の違いを率直に意見交換してもよいのではないかと。学校内の具体的な場面について、限定した方が児童にとって回答しやすいと思う。
○体を鍛え最後までやりぬく子	健康への関心と実践力を高める	体力の向上を目指す	健康的な体作りや体育授業の充実	すすんで外遊びや運動をしようとする児童を80%以上にする。	A	肯定的な回答が児童は8割・教職員は9割を超えている。学級を超えて学年の友達とかかわったり、校庭で担任とかかわったりしたい気持ちや屋外でできる遊びのほうがか児童にとって魅力的であることが考えられる。その一方で保護者・地域の方からの回答は、児童・教職員の回答より低くなっている。	放課後や休日にも、運動に親しむことに繋げる発信が必要。	体育的行事を通じて子供たちが外遊びの楽しさを味わっているのが伝わってきた。子供たちが生き生きと活動しているのが感動した。児童だけではなく、教職員の方々が休み時間に一緒になって休み時間に遊んでいる様子があり、児童もシーズン問わず外遊びをすることへの意識が高まっているように思う。
			基本的な生活習慣の確立への推進	給食指導を通して食育を推進し、バランスよく食べようとする児童を80%以上にする。	B	児童の肯定的な回答が9割近い一方、教職員の回答が3割弱とであり、大きく乖離している。児童は全種類食べていることでバランスよく食べていると感じているが、教職員は全種類を同じ分量食べてほしいという願いがあり、「バランスよく食べる」ことに対する認識が違うからであることが考えられる。	学級活動の年間指導計画に基づき、食育指導を確実にを行うことを通じて、三大栄養素の観点からバランスよく食べることのよさを確実に指導する。	給食の約束を見直し、食べる前から苦手な食べ物を減らし、自分が食べられる量に調整する取組は、大変評価できる。苦手な食べ物を少しでも頑張って食べたという経験が児童の中でも満足のいくものになっている。

達成状況の指標 A：100%以上 B 90%以上 C 90%以下 (指標の数値に対する割合)